

# 相模野地域における 縄文時代草創期遺跡のあり方

— 隆線文期の評価をめぐって —

桜井 準也

## 1. はじめに

相模野台地およびその周辺の丘陵地帯で構成される相模野地域には、多くの縄文時代草創期の遺跡<sup>(1)</sup>が分布している。このうち、大和市や綾瀬市を中心とする地域には縄文文化の遡源を探るうえで重要な遺跡群が集中している。無文土器と隆線文土器が文化層を異にして出土した大和市上野遺跡（大和市教育委員会1986）をはじめ、刺突文土器が出土した大和市相模野第149遺跡（大和市教育委員会1989）、刺突文土器と尖頭器群が出土した綾瀬市寺尾遺跡（神奈川県教育委員会1980）、無文土器と細石刃石核が共伴した相模原市勝坂遺跡（相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団1993）、多量の尖頭器群が出土した座間市栗原中丸遺跡（神奈川県立埋蔵文化財センター1984）や綾瀬市吉岡遺跡群（白石・砂田1992）などである。また、後続する隆線文土器の時期では大和市上野遺跡や長堀北遺跡（大和市教育委員会1990）などがあるが、この時期には南部の藤沢市域で遺跡が急に増加する。藤沢市代官山遺跡（神奈川県立埋蔵文化財センター1986）、慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶応義塾1992・1994）、南鍛冶山遺跡（藤沢市教育委員会1994）、柄沢遺跡群（柄沢遺跡調査団1991）などである。さらに、爪形文土器や多縄文土器の時期の遺跡としては、大和市深見諏訪山遺跡（大和市教育委員会1983）、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡（柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団1983）、藤沢市代官山遺跡、今田遺跡（今田遺跡発掘調査団1992）、南葛野遺跡（南葛野遺跡調査団1995）、柄沢遺跡群などがあげられる。この他にも有茎尖頭器が単独で出土する遺跡も多く、全国的にみて本地域は草創期の遺跡が集中する地域であるといえる。

また、本地域は草創期の遺構検出事例も多く、住居状遺構が勝坂遺跡、慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡、南鍛冶山遺跡で検出されている。また、広範囲に調査が行われたという点では慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡は約12万m<sup>2</sup>にわたる調査がなされた遺跡であり、数多くの遺物集中部や遺物が出土し、隆線文期の遺跡のあり方やセツルメントシステムを検討することが可能な遺跡である。

このように、草創期研究において相模野地域は全国的にみても注目される地域であり、遺跡論や領域論を展開できる地域でもある。そこで本稿では本地域で検出された遺構や遺物集中部のあり方について検討するとともに、遺跡の分布や立地についても触れ、旧石器（岩宿）時代から縄文時代に至る過渡期として位置づけられる隆線文期の評価を試みて

みたい。

## 2. 相模野地域の住居状遺構

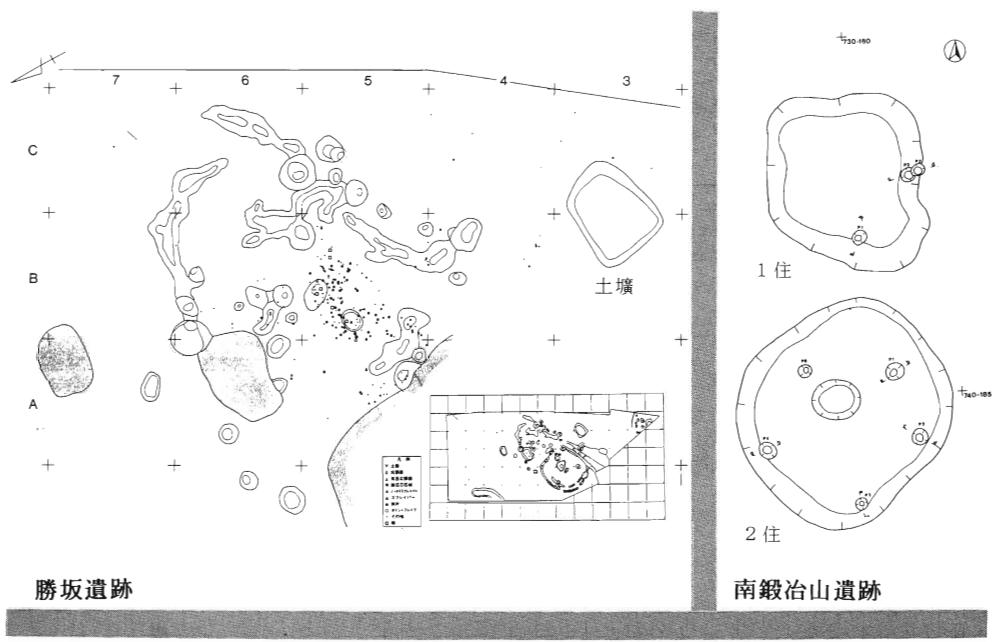
関東地方における縄文時代草創期の住居ないし住居状遺構とされる遺構としては、東京都秋川市前田耕地遺跡（前田耕地遺跡調査会1983）、練馬区もみじ山遺跡（東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会1993）、埼玉県花園町宮林遺跡（埼玉県埋蔵文化財事業団1985）、神奈川県横浜市花見山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1995）などがある。近年、静岡県沼津市葛原沢第IV遺跡（池谷他1995）や長野県上松町お宮の森裏遺跡（上松町教育委員会1995）などでも住居状遺構が検出され、草創期の住居跡の検出例は確実に増加している。相模野地域でも勝坂遺跡をはじめ慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡、南鍛冶山遺跡で住居状遺構が検出されている。以下で詳細に検討してみたい。

### 勝坂遺跡（第1図左上）

本遺跡では約14m×10mの範囲で草創期前半期の住居状遺構や遺物集中区（第1～3）が分布している。このうち住居状遺構は第1集中区に位置し、硬化した床面とピットで構成される。規模は約6m×4mの台形を呈し、10基のピット、浅い溝、炉址が存在する。このうちピットについては、漸移層を覆土とし、大ピット（直径約40cm）4基、小ピット（直径約10cm）9基、中央ピット（直径約30cm）1基があり、大ピットの中には中込め石と考えられる拳大の礫を規則的に配したものがある。炉址は硬化面上の礫2個を組み合わせた施設で礫は被熱しており、周囲に焼土もみられる。出土遺物は無文土器1点、細石刃石核1点、尖頭器1点などである。また、本住居状遺構の南西約2mの位置に土坑、北東約2mの位置に礫群が検出されている。このうち、土坑は台形の形状を呈し、長さ1.48m、幅1.15m、深さ0.4mを測る。遺物は出土していない。礫群は17個の礫で構成され、直径約1mの範囲に散漫に分布している。すべての礫が被熱しており、タールが付着している。ハンマーストーン2点、大型剥片1点が伴出している。

### 南鍛冶山遺跡（第1図右上）

本遺跡では遺跡南西部に草創期1号遺物集中部が分布し、約25m×10mの範囲に草創期の遺構や遺物が分布している。<sup>(2)</sup>本遺物集中部からは住居状遺構2軒、配石遺構2基、炭化物集中2ヶ所、碎片集中1ヶ所、土器集中1ヶ所、礫集中3ヶ所の遺構群とともに、遺物が多量に出土している。このうち、隆線文土器は3個体71点、石器類は尖頭器1点、有茎尖頭器10点、打製石斧7点、削器1点、磨石2点、礫器1点、ハンマーストーン1点、台石1点、剥片630点、碎片451点、礫154点の計1330点の遺物が出土している。2軒検出さ



第1図 相模野地域の住居状遺構

れた住居状遺構はともに竪穴状の遺構であり、1号住居状遺構は1・2号炭化物集中や碎片集中に囲まれているが、1・2号配石遺構の直下で検出されていることや覆土の状況などから他の遺構群より形成時期が古いと思われる。長径3.3m、短径2.8mの不整楕円形を呈し、南東側に2基の柱穴（東側の1基は内側に移動）を伴っている。床面に硬化面や炉址はみられず、床面と壁面の区分も不明瞭である。土層の落ち込みや柱穴が明瞭であったため住居状遺構と認定したが、自然の落ち込みに若干手を加えた上で斜面下側に2本の柱を建てたテント状の住居であった可能性が高い。出土遺物は剥片15点、碎片1点、礫1点、計17点である。2号住居状遺構は1号住居状遺構の南西約10mに位置し、長径3.4m、短径3.2mの楕円形を呈し、中心よりやや北西にずれた位置に若干の炭化物を含む炉址状の落込みと5本の柱穴を伴う。床はしっかりしており、柱穴も存在することから竪穴住居状の遺構と判断した。出土遺物は隆線文土器1個体9点、礫2点、計11点である。

#### 慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡（第1図下）

本遺跡では遺跡南西部のⅡ区のB遺物集中部より草創期の住居状遺構が検出された。長径約7m、単径約6mで9基の柱穴が円形に配列されている。内側は床面状の硬化面、ドーナツ状の落込み、炭化物を伴う中央の落込みで構成される。このうち柱穴については、漸移層を覆土とし、床面上から下部のハードロームまで掘り込まれている。また、ピットの形態・規模・深さもほぼ揃っており、配列も規則的である。床面を想定している硬化面は、ピットの配列と合致した楕円形を呈し、ドーナツ状の落ち込み部分を除いてほぼ平坦であり、出土した大形礫の底面と床面レベルが一致する。中央の炭化物を伴う落込みは、形態はやや不定形ながら、遺構の中心に位置すること、周囲の礫の中心部を向く面が赤化していることや古地磁気測定でも最も被熱を受けた可能性が高いことから、炉址と考えられる。また、南西方向にピットが認められなかったことから、この方向に入口が存在した可能性がある。出土遺物は隆線文土器2個体72点、石器類は有茎尖頭器1点、磨石1点、打製石斧2点、磨石1点、石核1点、剥片5点、碎片15点、礫16点の計114点である。遺物の分布状況は隆線文土器が住居北東部に中心を持ち、打製石斧や磨石が中央部炉東側にまとまり、石器の調整等によると考えられる微細な碎片が南西部から遺構硬化面の南西側斜面にかけて分布している。

また、報告書作成時には住居状遺構とは認定しなかったが、本遺跡ではⅠ区およびⅢ区で円形に廻るピット群が検出されている。このうち、Ⅰ区のピット群はⅠ区A遺物集中部の中央部で検出された。深さは一定しないが漸移層を覆土とするピットは12基あり、径約3.3mで円形に配列する。その東側にも半円状に並ぶ同様のピット群がみられ、関連する可能性がある。ピット群周辺の遺物分布状況としては北側に礫の集中区域、南側に石器や剥片の集中区域がみられ、その間に隆線文土器片4個体がまとまって出土している。Ⅲ区

のピット群はⅢ区D遺物集中部の中央部で検出された。黒土層下層を覆土とするピットが20基程あり、径約6.5mで円形に配列する。また、ピット群の西側はピットが少なく、入口とも考えられる。ピット群内部から遺物は出土しなかったが、西側にピット群と重なるように土器片が狭い範囲に分布し、さらに西側には石器や剥片、礫などが高い密度で分布している。このようなピット群の配置や遺物分布との関係をみると、これらのピット群が居住施設の一部であった可能性が高い。<sup>(3)</sup>

旧石器（岩宿）時代から縄文時代初頭にかけての住居状の遺構については、既に様々な論考がみられる。旧石器（岩宿）時代においては北海道中本遺跡、山形県越中山遺跡A'地点、神奈川県上和田城山遺跡、長野県駒形遺跡、大阪府はさみ山遺跡、広島県西ガガラ遺跡、福岡県椎木山遺跡、鹿児島県上場遺跡などの事例があげられるが、その多くは疑問視され、確実な事例はそれほど多くはないとしている（鈴木1983a・1995、稻田1986、栗島1989）。これに対し、草創期の住居状遺構は、葛原沢遺跡やお宮の森裏遺跡の事例にみられるように、ここ数年確実に検出例が増加している。しかし、草創期の住居状遺構は規模にかなりバラツキがあり、構造や付帯施設の検出状況も一定していない。形態的には柱穴とみられるピットの廻るタイプと掘り込みを持つ竪穴住居タイプがある。現段階での検出事例をまとめると、草創期前半期から隆線文期にかけて両タイプがみられ、爪形文・多縄文期になると竪穴住居に統一されるようである。また、爪形文・多縄文期では、お宮の森裏遺跡で9軒の竪穴住居からなる集落が検出されている。このように、草創期になると旧石器（岩宿）時代に比べ住居をはじめとする遺構の検出例が増加し、草創期前半期から隆線文期にかけてが過渡期となり、爪形文・多縄文期に住居構造が安定し、集落の萌芽がみられる。これに対し、草創期に後続する撫糸文期の竪穴住居については原田昌幸の一連の論考（原田1983・1984・1988）がある。この中で原田は撫糸文期以前の前田耕地遺跡や宮林遺跡の事例を検討した結果、壁と床が未分化であることや柱穴配置等からこれらの住居が仮設のテントや準平地住居の枠内にとどまっているとしている。しかし、その後検出状況の良好な事例が増加しており、その解釈には変更を要すると思われる。いずれにしろ、住居の存在は定住性の問題と大きく関わる重要な事項であり、住居構造や耐久性の問題だけでなく、遺物の出土状況や他の遺構群との関係、さらには集団の移動様式やセツルメントの問題など、より総合的な視点で捉えてゆく必要がある。<sup>(4)</sup>

### 3. 草創期の居住活動とセツルメント

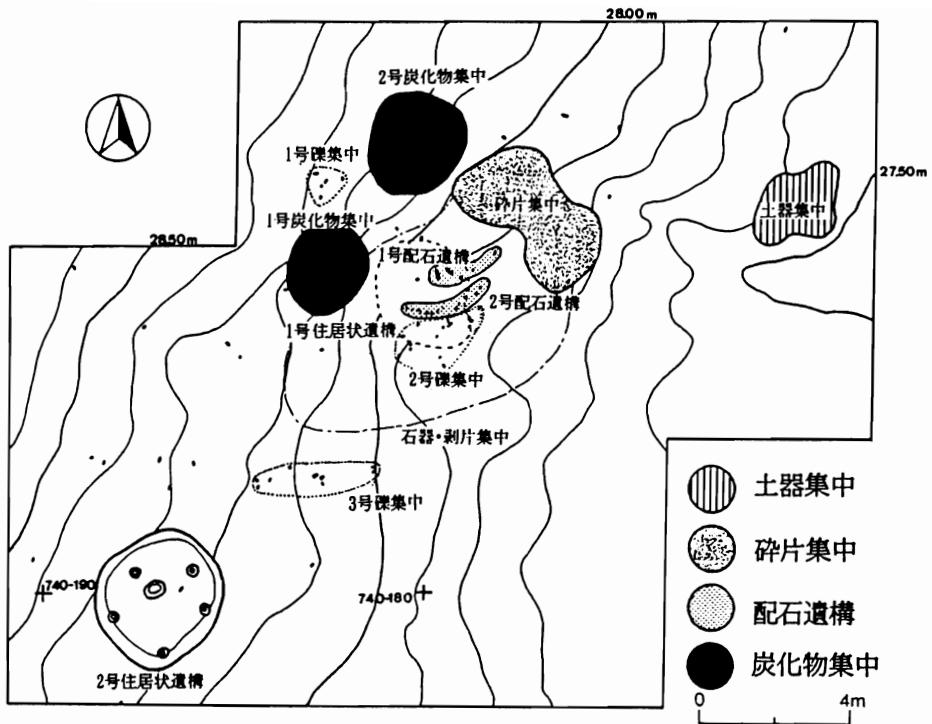
相模野地域においては、草創期の居住活動の実体を探るうえで重要な遺跡がいくつか存在する。このうち南鍛冶山遺跡は草創期の遺物集中部内の居住活動を考える上で好都合な

遺跡であり、慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡は広範囲にわたる調査を行い、遺物集中部のセツルメントとしての位置づけが可能な遺跡である。ここでは、これらの事例を検討することによって草創期の居住活動やセツルメントについて若干検討してみたい。

### (1) 南鍛冶山遺跡の遺構群分布

本遺跡で遺構群が検出された1号遺物集中部（隆線文期）は遺跡の南東部にあたり、南東に傾斜する緩斜面上に位置し、遺構や遺物は28mの等高線に沿って約25m×10mの範囲に分布している（第2図）。本遺物集中部からは住居状遺構2軒、配石遺構2基、炭化物集中2ヶ所、碎片集中1ヶ所、土器集中1ヶ所、礫集中3ヶ所が検出されている。既に述べたように、住居状遺構は2軒とも竪穴住居状の遺構であり、1号住居状遺構は長径3.3m、短径2.8mの不整橢円形を呈し、南東側に柱穴を伴っている。2号住居状遺構は長径3.4m、短径3.2mの橢円形を呈し、中心よりやや北西にずれた位置に炉址状の落込みと5本の柱穴を伴っている。また、1号住居状遺構埋没後、1号配石遺構が形成されていることや礫の接合状況などから1号住居状遺構は他の遺構群とは時期を異にしていると考えられる。1号住居状遺構を除く遺構群の配置は、遺物集中部のほぼ中央に1・2号配石遺構、その西側に1号炭化物集中、北側に2号炭化物集中、北東部に碎片集中、東側約10mに1号土器集中が存在し、2号住居状遺構は南西方向約10mに位置している。このうち、1・2号配石遺構は同一方向に礫が弧状に配列され、内側には比較的大形の礫や隆線文土器片も2点が出土しており、遺物の集中する地点の中心に位置していることから、テント状の作業小屋の関連施設であった可能性がある。炭化物集中については2号炭化物集中部で直下に径30cm、深さ20cm程度の土壙が多数重なりあって検出され、覆土中に比較的大形の炭化物がみられることから燃料材の廃材を廃棄したものと考えられる。碎片集中については、ほとんどが尖頭器類の素材として用いられる安山岩の長さ2cm以下の微細な碎片であることから、この地点が本集中部では尖頭器類の製作が行われた地点あるいは製作の際に飛散した碎片を廃棄した地点であると考えられる。土器集中については、集中に粗密があり、小破片のみであることや周囲から遺物が出土していないことから土器の廃棄場所と考えられる。また、3ヶ所検出された礫集中のうち、1号礫集中については、土器の煮炊きの際、五徳として用いられた可能性のある一端が明瞭に赤化した棒状礫で構成されていることや炭化物集中の脇であることから、この地点で煮炊きが行われた可能性がある。また、有茎尖頭器や打製石斧など石器類の多くが1・2号配石を中心とする約8m×6mの範囲から出土しており、この地点で道具の製作や保守などが行われていたと思われる。

このように、本遺跡では隆線文期の遺物集中部内の遺構群分布から諸活動の場が想定できる。具体的には「作業空間（1・2号配石遺構周辺）」「尖頭器製作空間あるいは碎片廃棄空間（1号碎片集中）」「居住空間（2号住居状遺構）」「煮炊き空間（1号礫集中）」「燃



第2図 南鍛冶山遺跡遺構分布

料材廃棄空間（1・2号炭化物集中）」「土器廃棄空間（1号土器集中）」である。このことは当時は、道具類の製作→使用→片付け・廃棄が同じ場所ではなく、それぞれ決まった場所で行われていたことを意味し、隆線文期には居住地の空間利用に一定の規則があったことを示している。

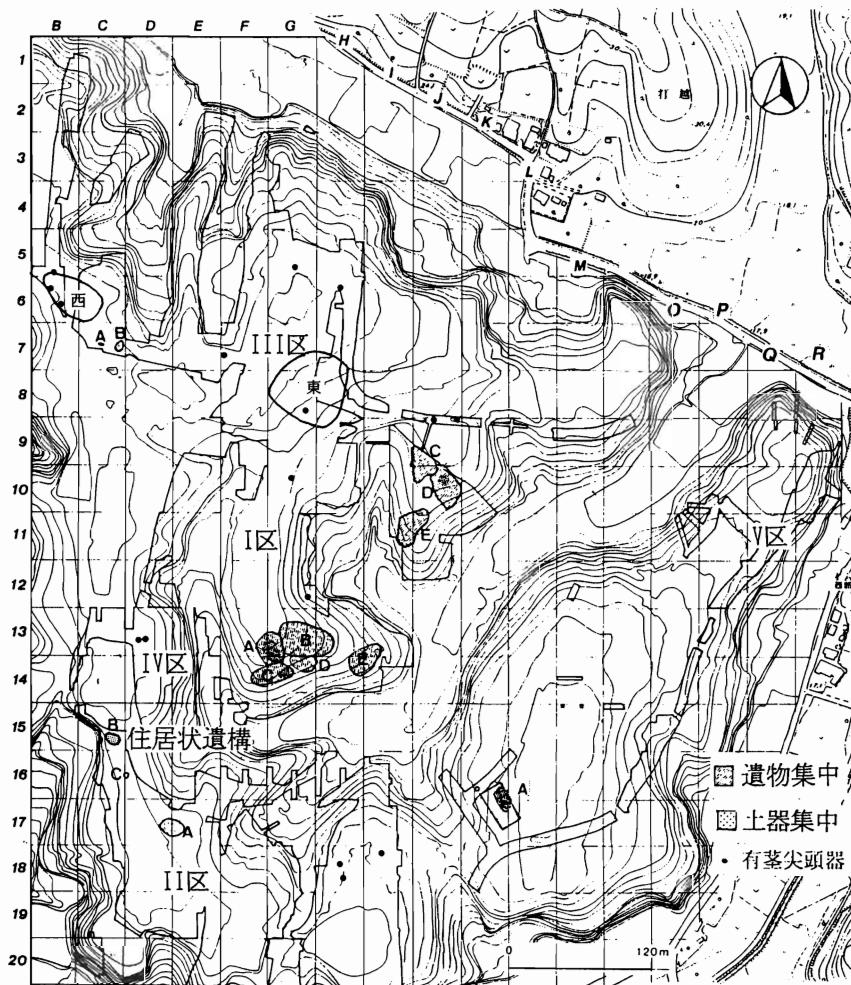
## (2) 慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の遺物集中部のあり方

本遺跡の草創期第2文化層（隆線文期）では、14ヶ所の遺物集中部および住居状遺構など多数の遺構群が検出されている。このうち、I区ではA～E集中部の5遺物集中部および円形に廻るピット群1ヶ所（A遺物集中部）が検出され、II区ではA～Cの3遺物集中部および住居状遺構（B遺物集中部）と炭化物集中2ヶ所（A遺物集中部）、III区ではA～Eの5遺物集中部および円形に廻るピット群（C遺物集中部）が検出されている（慶応義塾 1992）。また、その後2回にわたって追加調査が行われ、V区で遺物集中部（A遺物集中部）が新たに検出された（慶応義塾1994）。

このように約12万m<sup>2</sup>の広範囲にわたる調査が行われた結果、多数の遺物とともに住居状遺構をはじめとする遺構群や多くの遺物集中部が検出された本遺跡は草創期の居住活動や生業活動のあり方を探るうえで貴重なデータを提供する。今回は草創期の遺物集中部の規模や分布構造から遺物集中部の類型化を試み、遺物集中部のあり方について考察してみたい。

第1表 慶応SFC遺跡の遺物集中部

| 集中部     | 規 模(m)    | 面積(m <sup>2</sup> ) | 遺物数 | 遺物密度                  | 土器(個体) | 狩獵具       | 他の石器      | 剥片類        | 礫   | 遺構    | 分布構造 | 類型  |
|---------|-----------|---------------------|-----|-----------------------|--------|-----------|-----------|------------|-----|-------|------|-----|
| I区A～D   | 76.1×44.4 | 2303                | 547 | 0.24/m <sup>2</sup>   | 74( 6) | 27( 9.4%) | 36(12.5%) | 224(78.0%) | 186 | ピット群  | 重層的  | A 1 |
| II区 A   | 19.9×13.1 | 176                 | 113 | 0.64/m <sup>2</sup>   | 0( 0)  | 3( 3.8%)  | 20(25.3%) | 56(70.9%)  | 34  | 炭化物集中 | 単層的  | B 2 |
| B       | 12.5× 7.5 | 66                  | 107 | 1.62/m <sup>2</sup>   | 66( 4) | 1( 4.0%)  | 4(16.0%)  | 20(80.0%)  | 16  | 住居状遺構 | 重層的  | B 1 |
| C       | 5.6× 3.0  | 10                  | 13  | 1.30/m <sup>2</sup>   | 0( 0)  | 0( 0.0%)  | 3(33.3%)  | 6(66.7%)   | 4   | なし    | 単層的  | C 2 |
| III区A～B | 21.1×10.0 | 136                 | 138 | 1.01/m <sup>2</sup>   | 11( 1) | 4( 6.7%)  | 10(16.7%) | 46(76.7%)  | 67  | なし    | 重層的  | B 1 |
| C～D     | 55.2×25.2 | 1980                | 451 | 0.22/m <sup>2</sup>   | 13( 2) | 11( 7.2%) | 24(15.7%) | 118(77.1%) | 285 | ピット群  | 重層的  | A 1 |
| E       | 36.5×19.9 | 470                 | 34  | 0.07/m <sup>2</sup>   | 0( 0)  | 4(28.6%)  | 5(35.7%)  | 5(35.7%)   | 20  | なし    | 単層的  | D 2 |
| III区西侧  | 64.1×32.4 | 1387                | 27  | 0.02/m <sup>2</sup>   | 0( 0)  | 3(11.1%)  | 4(14.8%)  | 20(74.1%)  | 0   | なし    | 単層的  | D 2 |
| III区東側  | 65.3×63.5 | 2497                | 26  | 0.01/m <sup>2</sup>   | 0( 0)  | 4(15.4%)  | 5(19.2%)  | 17(65.4%)  | 0   | なし    | 単層的  | D 2 |
| V区 A    | 17.1×11.4 | 121                 | 119 | 0.98/m <sup>2</sup>   | 42( 3) | 10(13.7%) | 2( 2.7%)  | 61(83.6%)  | 4   | なし    | 重層的  | B 1 |
| 集中部外    | —         | 117000              | 63  | 0.0005/m <sup>2</sup> | 5( 1)  | 16(30.8%) | 15(28.8%) | 21(40.4%)  | 6   | なし    | —    | E 2 |



第3図 慶応SFC遺跡の遺物集中部分布

なお、草創期第2文化層の遺物集中部については、報文では視覚的なまとまりで区分したが、今回は遺物集中部の分布状況や遺物の接合状態を再検討し、同一集団が残した可能性が高い遺物集中部はまとめて取り扱うこととした。具体的には、I区A～D集中部<sup>(5)</sup>、III区A・B集中部、C・D集中部は一つのまとまりとして扱った。さらに、報文では遺物集中部と認定しなかったが、遺物集中部外の中でも集中度は低いが遺物が集中する地点がIII区に2ヶ所（III区西集中部、東集中部）存在するため、今回はこれらも分析対象とし、有茎尖頭器などが単独出土した遺物集中部外についても議論の対象とした。また、追加調査により検出されたV区のA遺物集中部の事例も追加した（第3図、第1表）。

まず、遺物集中部の類型化を行うにあたり、これら8ヶ所の遺物集中部および遺物集中部外について、遺物集中部の面積と遺物密度の比較を行った。その結果、遺物集中部外も含め次の5つに分類することができた（第4図左下）。

A類：面積が2000m<sup>2</sup>程度と大規模であるが遺物密度は0.2個／m<sup>2</sup>程度と低い（I区A～D遺物集中部、III区C・D遺物集中部）

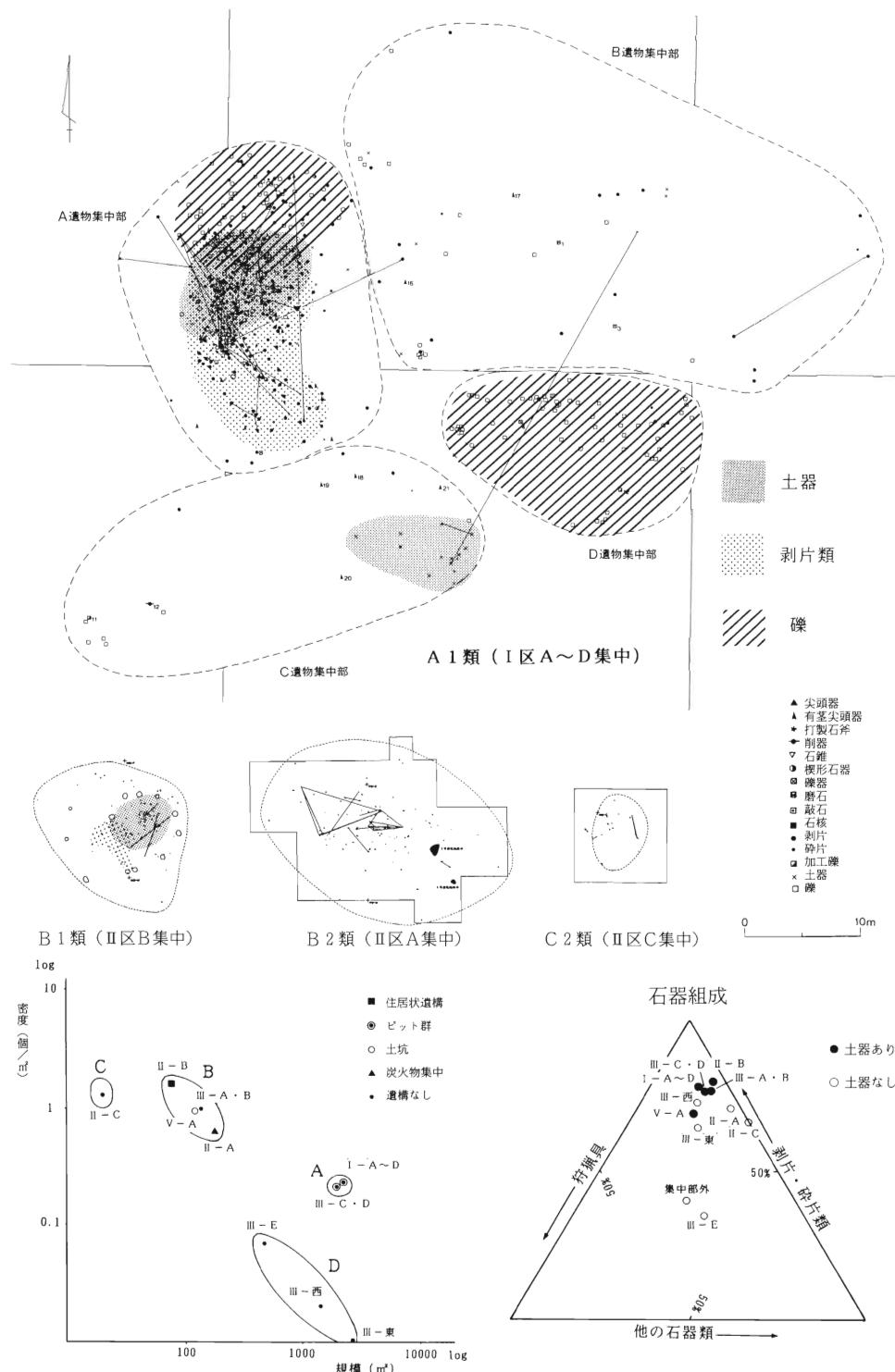
B類：面積が100m<sup>2</sup>～200m<sup>2</sup>程度と中規模であるが遺物密度は1個／m<sup>2</sup>前後と高い（II区A遺物集中部、B遺物集中部（住居状遺構）、III区A・B遺物集中部、V区A遺物集中部）

C類：面積が20m<sup>2</sup>程度と小規模であるが遺物密度は1個／m<sup>2</sup>程度と高い（II区C遺物集中部）

D類：面積が500m<sup>2</sup>～2500m<sup>2</sup>程度と大規模であるが、遺物密度は0.1個／m<sup>2</sup>未満とかなり低い（III区E遺物集中部、西遺物集中部、東遺物集中部）

E類：遺物密度は0.0005個／m<sup>2</sup>と極端に低い（遺物集中部外）

また、遺物集中部内の遺物の分布状況について詳細に検討すると、遺物集中部内に土器や石器類がまとまって分布している事例があることがわかる。このような遺物集中部内の分布構造は、重層的・単層的として類型化することができる。ここで重層的（1類）とは遺物集中部内部にさらに土器・石器・剥片・礫のまとまりが存在し、分布が二重構造を呈している場合である。具体的にはI区A～D遺物集中部、III区C・D遺物集中部、II区B遺物集中部（住居状遺構）、III区A・B遺物集中部、V区A遺物集中部がこれにあたる。これに対し、単層的（2類）とは遺物集中部内に遺物の種類による特定のまとまりがみられず、全体的にランダムに遺物が分布している場合である。具体的にはII区A遺物集中部、II区C遺物集中部、III区E遺物集中部、西遺物集中部、東遺物集中部がこれにあたる。以上の遺物集中部の類型の組み合わせによって本遺跡の遺物集中部はA1類、B1類、B2類、C2類、D2類、E2類の6類型に分類できる（第4図上、第2表）。



第4図 慶応SFC遺跡の遺物集中部類型

第2表 慶応SFC遺跡の遺物集中部類型

| 類型  | 規模 | 密度 | 分布構造 | 遺構    | 居住 | 土器 | 石器製作 | 性格     | 事例                                 |
|-----|----|----|------|-------|----|----|------|--------|------------------------------------|
| A 1 | 大  | 中  | 重層的  | ピット群  | ○  | ○  | ◎    | 居住地    | I 区 A～D 集中部、III 区 C～D 集中部          |
| B 1 | 中  | 高  | 重層的  | 住居状遺構 | ○  | ○  | ○    | 居住地    | II 区 B 集中部、III 区 A・B 集中部、V 区 A 集中部 |
| B 2 | 高  | 高  | 単層的  | 炭化物集中 | △  | ×  | ○    | 居住・野営地 | II 区 A 集中部                         |
| C 2 | 中  | 高  | 単層的  | な     | ×  | ×  | ◎    | 石器製作場  | II 区 C 集中部                         |
| D 2 | 小  | 低  | 単層的  | な     | ×  | ×  | △    | 野営地    | III 区 E 集中部、III 区 西側集中部、III 区 東集中部 |
| E 2 | 大  | 散漫 | 単層的  | な     | ×  | ×  | ×    | 狩猟地    | 遺物集中部外                             |

次に、このような遺物集中部の類型と他の諸属性との関係について検討してみたい。まず、遺構の検出状況について検討すると、A 1 類では I 区 A～D 遺物集中部、III 区 C・D 遺物集中部とともにピット群、B 1 類では II 区 B 遺物集中部で住居状遺構、B 2 類では II 区 A 遺物集中部で炭化物集中が 2 ケ所検出されている。隆線文土器の出土状況をみると、隆線文土器が出土している遺物集中部は 5 ケ所あり、A 1 類では I 区 A～D 遺物集中部（6 個体 74 点）、III 区 C・D 遺物集中部（2 個体 13 点）、B 1 類では II 区 B 遺物集中部（4 個体 66 点）、III 区 A・B 遺物集中部（1 個体 11 点）、V 区 A 遺物集中部（3 個体 42 点）である。遺物集中部内の石器組成については、石器群を狩猟具（尖頭器・有茎尖頭器・削器）、他の石器類（打製石斧・磨石・礫器など）、剥片・碎片類に区分してグラフ化した結果、遺物集中部の石器組成はおおまかに以下のように分類できる（第 4 図右下）。

イ：狩猟具の比率がとくに高く、剥片・碎片類の比率が低い遺物集中部（III 区 E 遺物集中部、遺物集中部外）

ロ：狩猟具および剥片・碎片類の比率がやや高い遺物集中部（III 区 東遺物集中部、西遺物集中部、V 区 A 遺物集中部）

ハ：剥片・碎片の比率が高い遺物集中部（I 区 A～D 遺物集中部、II 区 B 遺物集中部、III 区 A～B 遺物集中部、C～D 遺物集中部）

ニ：狩猟具がほとんどみられない遺物集中部（II 区 A 遺物集中部、C 遺物集中部）

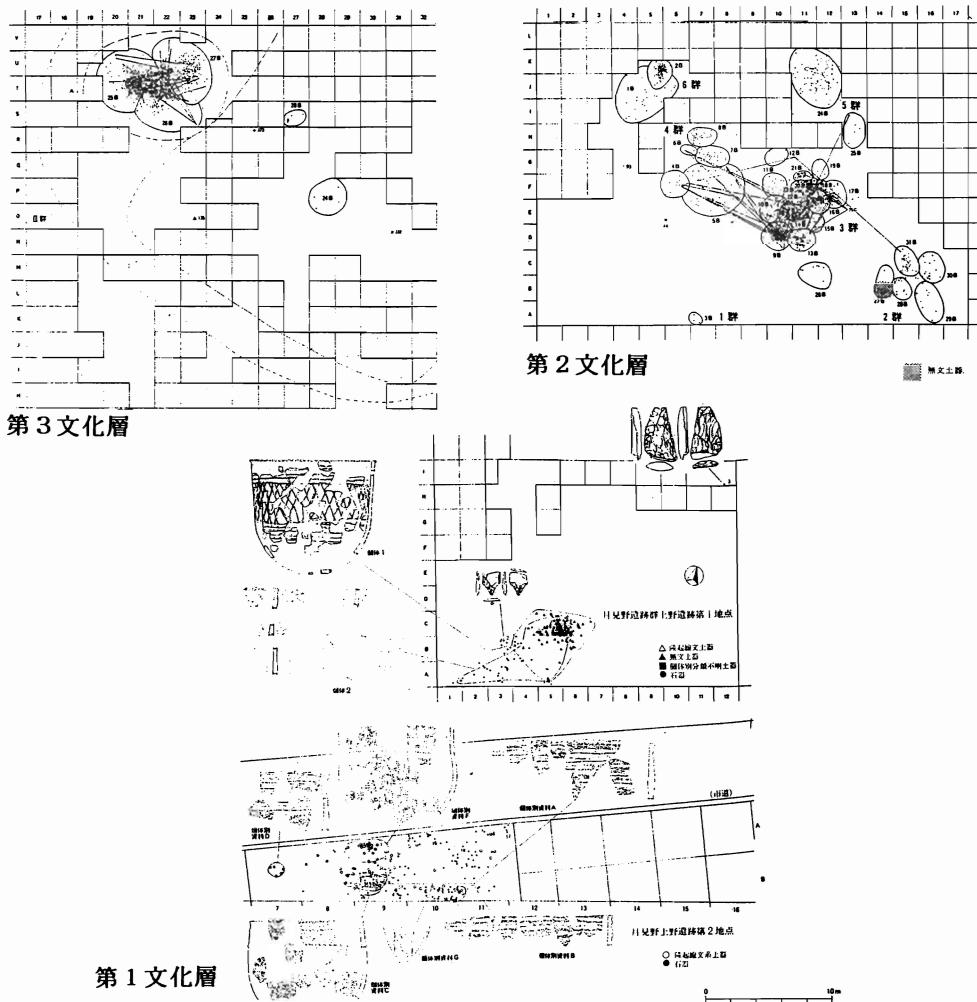
また、有茎尖頭器の遺存状態をみると完形品が多い遺物集中部として I 区 A～D 遺物集中部、III 区 C・D 遺物集中部があげられる。これらの遺物集中部では未成品の比率も高いことから尖頭器類の製作が行われていたと考えられる。これに対し、遺物集中部外では先端部が欠損したものや先端部と茎部の両端が欠損したものが多く、これらは狩猟の際破損したものをそのまま廃棄した結果であると思われる（桜井 1993c）。

このような慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡における遺物集中部類型と他の諸属性との比較により、A 1 類は拠点的で規模の大きな居住地、B 1 類は規模のやや小さな居住地、B 2 類は規模のやや小さな居住地あるいは野営地、C 2 類は石器製作地、D 2 類は野営地、E 2 類は狩猟地という遺物集中部の性格づけができる（第 2 表）。

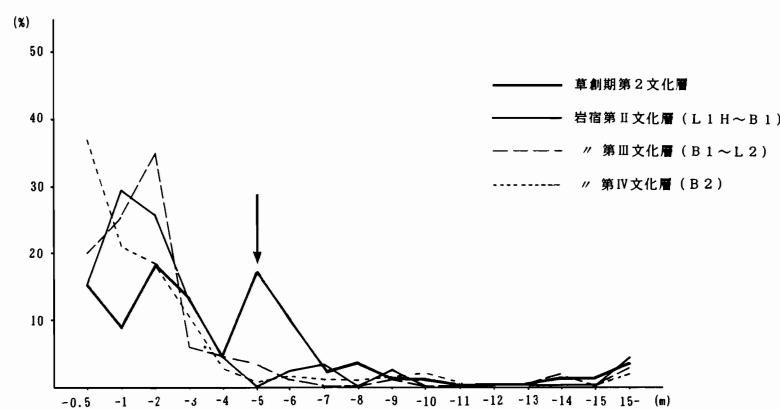
### (3) 遺物の分布と接合距離にみる居住地内の廃棄行動

既に述べた南鍛冶山遺跡の事例にみられるように、隆線文期には居住地内の空間利用に一定の規則があったと思われる。このことは、同時に居住地の内部が住居に代表される「居住空間」、石器の製作や保守といった作業を行なう「作業空間」や燃料材の燃えカス、壊れた土器や石器製作の際の生じる碎片などを廃棄する「廃棄空間」におおまかに区分できることを意味している。なかでも燃料材の廃棄行動に関しては、炭化物集中の検出状況から打製石斧で穴を掘り、燃えカスをその都度廃棄していた可能性が高く、当時の人々の防火に対する意識の高さがみてとれる。また、竪穴状の住居状遺構の存在も含め、この時期に地面を掘るという行為が居住活動の中で一定のウェイトを占めていたと推定される点も見逃せない。

このような隆線文期の居住地内の廃棄行動について評価するため、ここでは居住地内の遺物分布状況に関して、前段階の旧石器（岩宿）時代や草創期前半期の状況と比較することにより、検討してみたい。比較検討の材料としては大和市上野遺跡の第1～3文化層の事例を用い、遺物分布図を同一縮尺で並べて遺物分布パターンの比較を行った（第5図）。これをみると、第3文化層（細石刃文化期）と第2文化層（草創期前半期）の遺物分布パターンや遺物の接合状態はよく似ているが、第1文化層（隆線文期）とは遺物の分布状況が明らかに異なっていることがわかる。つまり、第2・3文化層では石器製作地点と思われる複数の地点に明確な遺物の集中がみられ、それらが一定間隔で分布しているのに対し、第1文化層では前者に比べ集中度が低く全体として一つの集中部を形成しており、内部に隆線文土器や特定の石器・剥片などの集中する箇所がみられることがわかる。次に、遺物の接合距離という視点から検討してみたい。慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の旧石器（岩宿）時代と隆線文期の石器や礫の接合資料について、縦軸に頻度（パーセント）、横軸に接合距離を設定したグラフを作成した（第6図）。その結果、旧石器（岩宿）時代のグラフはいずれも接合距離2m以下で接合する資料がほとんどで、2m以上になると接合例は急激に低下する。これに対し、隆線文期のグラフは弱い双峰形を呈し、接合距離2m以下と接合距離4～5m（矢印）にピークを持つことがわかった。これらの分析結果は、旧石器（岩宿）時代や草創期前半期と隆線文期で居住地の空間利用のあり方に違いがみられる事を示している。<sup>(6)</sup> 隆線文期以前は一部の製作した石器や石核は石器製作地点から外に持ち出され、使用されるものの、殆どの剥片・碎片類は石器製作地点にそのまま残されるため、遺物の集中箇所が明瞭で接合距離が近距離に集中している。これに対し、隆線文期の場合は4～5m移動して石器や礫の使用や再加工が行われ、剥片・碎片類も石器製作地点にそのまま残されるとは限らず、邪魔な場合は決まった場所に廃棄するという行為が頻繁に繰り返されたと推定される。このような隆線文期の居住地内の空間利用のあり方は、旧石器（岩宿）時代的というよりもより縄文的なあり方を呈しており、同時に旧石器（岩



第5図 大和市上野遺跡の遺物分布



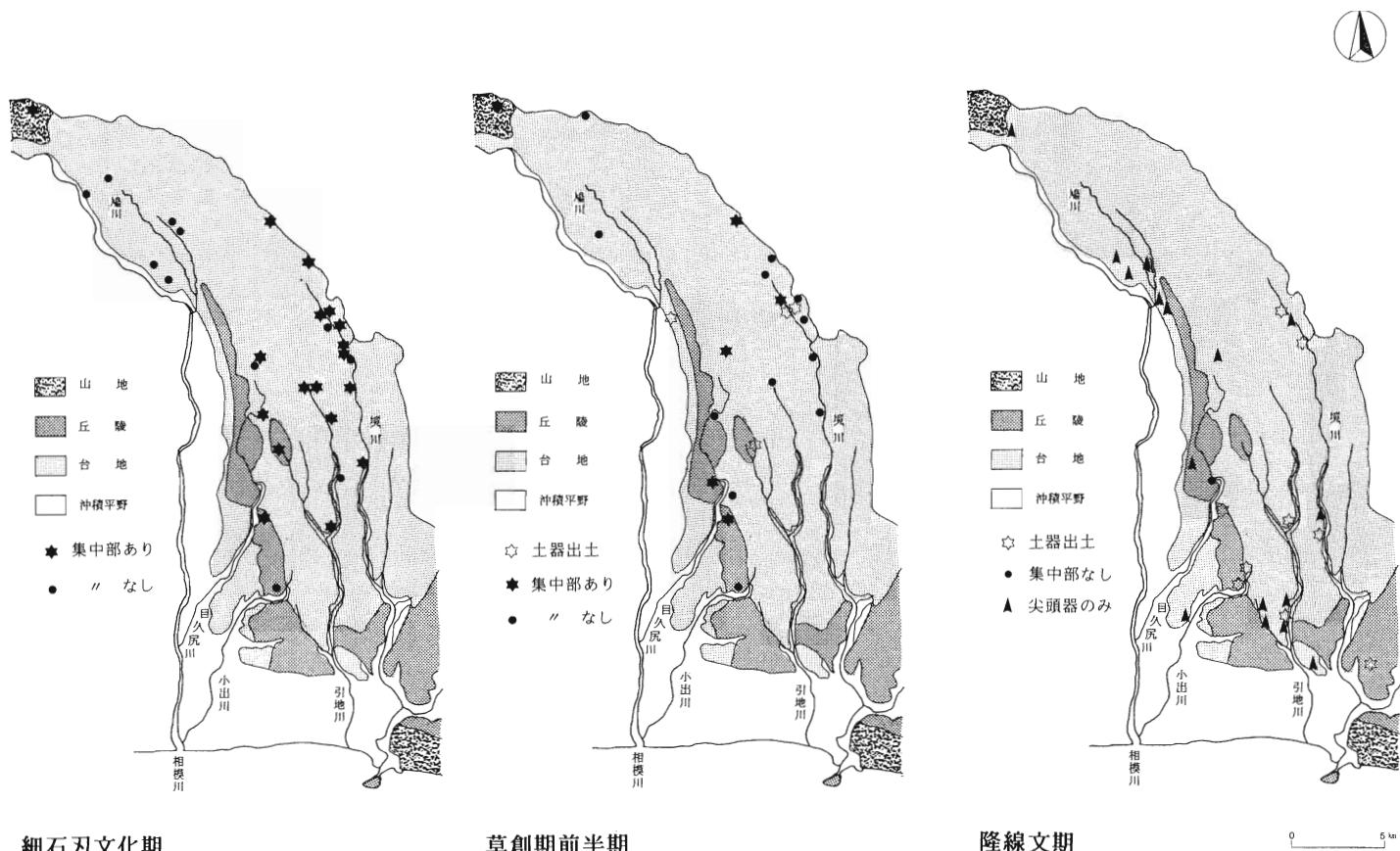
第6図 慶応SFC遺跡の遺物接合距離

宿) 時代から縄文時代へと移行する過渡期にあたる隆線文期の特徴を示しているといえる。

#### 4. 草創期遺跡の分布と立地

前項までは住居状遺構などの遺構群や遺物集中部のあり方について検討してきたが、ここでは遺跡の分布や立地について検討してみたい。まず、細石刃文化期から隆線文期に至る相模野地域の遺跡分布状況について細石刃文化期、草創期前半期、隆線文期にわけての遺跡分布図を作成した（第7図）<sup>(7)</sup>。これらを個別にみてゆくと細石刃文化期には相模野台地北部～中央部の大和市から相模原市にかけての地域に遺跡が集中し、相模野台地中央部付近に石器集中部を伴うやや規模の大きな遺跡が集中している。草創期前半期では、遺跡数はやや減少するが遺跡の分布域は細石刃文化期と大きく変わっていない。ところが隆線文期になると、遺跡の分布域が大和市北部および相模原市の相模野台地中央部と藤沢市を中心とする相模野台地南部から高座丘陵にかけての地域に分割される。水系別にみてゆくと、細石刃文化期や草創期前半期には境川、引地川、目久尻川、鳩川などの上流部および境川支流の目黒川に遺跡が集中している。隆線文期には相模野台地北部や中央部では目黒川および鳩川に遺跡が分布し、相模野台地南部から高座丘陵にかけては境川下流部、引地川中・下流部、小出川・目久尻川上流部に遺跡が分布している。このうち、後者の地域では細石刃文化期や草創期前半期には遺跡が少なかったにも関わらず、隆線文期に遺跡が急激に増加している。また、隆線文期の遺跡分布の特徴として、遺物集中部が形成され隆線文土器が出土している遺跡と尖頭器類のみが少量出土している遺跡がある程度地域的にまとまって分布していることがあげられる。このように、遺跡の分布傾向を視覚的に捉えると細石刃文化期から隆線文期にかけて遺跡の分布に変化がみられることが予想できるが、地形区別に遺跡数を集計してみたところ、丘陵地に立地する遺跡の比率が徐々に増加していることがわかった（第3表）。この傾向は草創期になって人々が相模野台地の小河川沿いから丘陵地へと進出した結果であると解釈できる。さらに、河川単位の遺跡数を集計したところ、細石刃文化期には境川を中心に引地川流域や目久尻川流域に遺跡が集中しているのに対し、隆線文期になると各河川の流域に遺跡が分散していることがわかる（第4表）。

以上の分析結果をまとめると、遺跡の分布や立地に関しては細石刃文化期には相模野台地中央部の小河川沿いに遺跡が“線的”に分布していたものが、隆線文期になると相模野台地南部や丘陵地に進出することにより遺跡が“面的”に分布するようになってきたことがわかった。この傾向は旧石器（岩宿）時代には小河川の上流域で頻繁に移動を繰り返していた集団が、隆線文期になると一定の領域を占有し、居住地、野営地、狩猟地などのセツルメントシステムを形成する生活様式へと変化していくことを意味するものである。



第7図 相模野地域の旧石器時代終末～草創期の遺跡分布

第3表 相模野地域の地形区分別遺跡数

| 地形区分 | 細石刃期       | 草創期前半期     | 隆線文期       | 合 計        |
|------|------------|------------|------------|------------|
| 台 地  | 28(87.5%)  | 17(77.3%)  | 20(76.9%)  | 65(81.3%)  |
| 丘 陵  | 3( 9.4%)   | 4(18.2%)   | 6(23.1%)   | 13(16.3%)  |
| 山 地  | 1( 3.1%)   | 1( 4.5%)   | 0( 0.0%)   | 2( 2.5%)   |
| 計    | 32(100.0%) | 22(100.0%) | 26(100.0%) | 80(100.1%) |

第4表 相模野地域の主要河川と遺跡数

| 河川名  | 長さ(km) | 総延長(km) | 水流数 | 水流数/長さ | 河川次数 | 細石刃期      | 草創期前半期    | 隆線文期     |
|------|--------|---------|-----|--------|------|-----------|-----------|----------|
| 境 川  | 49.7   | 88.9    | 13  | 0.26   | 3    | 15(46.9%) | 12(54.5%) | 6(21.4%) |
| 引地川  | 21.0   | 41.4    | 7   | 0.33   | 3    | 7(21.9%)  | 2( 9.1%)  | 7(25.0%) |
| 小出川  | 10.8   | 16.7    | 5   | 0.46   | 2    | 1( 3.1%)  | 1( 4.5%)  | 6(21.4%) |
| 目久尻川 | 19.4   | 24.8    | 3   | 0.15   | 2    | 4(12.5%)  | 5(22.7%)  | 4(14.3%) |
| 鳩 川  | 19.8   | 29.8    | 3   | 0.15   | 2    | 3( 9.4%)  | 1( 4.5%)  | 3(10.7%) |
| 八瀬川  | 6.2    | 6.2     | 1   | 0.16   | 1    | 2( 6.3%)  | 1( 4.5%)  | 2( 7.1%) |

## 5. おわりに 一隆線文期の位置づけをめぐって

以上述べてきたように、草創期の遺構や遺跡のあり方を検討すると、隆線文期が旧石器（岩宿）時代から縄文時代への過渡期にあたることがわかる。このうち、住居状遺構については旧石器（岩宿）時代には確実な事例は少ないのでに対し、草創期になると住居状遺構の検出例が増加する。住居の形態は、当初ピットの廻るタイプの住居と竪穴住居が並存するが、爪形文・多縄文期になると竪穴住居に統一されるようである。また、慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡や南鍛冶山遺跡の事例にみられるように、隆線文期になると一定の領域の中で「拠点的居住地」、「居住地」、「野営地」、「狩猟地」などで構成されるセツルメントシステムが形成され、居住地内の空間利用に一定の規則がみられることも指摘できる。このことは、従来遊動的で旧石器（岩宿）時代の生活の延長として捉えられていた草創期の生活が一定の領域をもったより定着性の強いものであったことを暗示している。また、今回は詳しく検討できなかったが、隆線文期に後続する爪形文・多縄文期の時期には複数の住居からなる集落が存在すること、有茎尖頭器が激減し、石鎌が多量に出土すること、石器組成に占める石皿や磨石の割合が増加することなど、定住化や植物の積極的利用などの縄文的要素がより強く見受けられる。その意味でも隆線文期は旧石器（岩宿）時代から縄文時代へと変化してゆく中で過渡期として位置づけられる。

次に、狩猟採集民の民族誌との比較から草創期の居住活動について若干考えてみたい。ビンフォードによると、狩猟採集民はフォレジャー型の民族とコレクター型の民族に区分されるとしている(Binford 1980)。フォレジャー(Forager)型の狩猟採集民とは食料を獲得するために居住地を点々と移動させるタイプの狩猟採集民でブッシュマンやオーストラリア・アボリジニなどがあげられる。これに対し、一定の領域の中に拠点的な集落が

あり、その周囲に移動キャンプを設け、食料獲得活動を行うものがコレクター型 (Collector) の狩猟採集民でカルフォルニア・インディアンやアイヌ、エスキモーなどがあげられる。また、フォレジャー型の狩猟採集民は食料の保存がみられないのに対し、コレクター型の狩猟採集民は貯蔵施設を持ち、豊富な食料資源を季節ごとに効率的に獲得することが強調されている。これを相模野地域の隆線文期の遺跡にあてはめてみると、住居状遺構などの居住施設や土坑などの貯蔵施設をはじめ様々な遺構群が存在し、居住地の空間利用に一定の規則がみられること、一定の領域を占有したセツルメントシステムが形成されていたと考えられることから相模野地域の隆線文期がフォレジャー型からコレクター型への過渡期として位置づけられる可能性がある。

最後に、このような居住活動の背景となる当時の生業活動について若干触れてみたい。縄文時代草創期には最終氷期以降の気候の温暖化とそれに伴う動植物相の変化によって、一部の種類を除き大型獣が絶滅し、狩猟対象獸がニホンジカやイノシシなど縄文的な動物相へと変化した時期にあたる。相模野地域での遺跡立地の変化、つまり隆線文期における丘陵地への進出の原因として、低地に近い丘陵地に棲息するイノシシの棲息環境（千葉 1969・77）が関連している可能性が考えられる。その背景には、狩猟活動が生業活動の中⼼的役割を果たしていたことがあげられ、狩猟具とされる尖頭器類の出土数が多く、植物加工工具とされる石皿や磨石の出土数が少ないとこの時期の石器組成のあり方がそれを裏付けている。いずれにしろ、今後は地域ごとに地形の起伏量（桜井 1993b）の分析を行い、後氷期の動物の棲息域と微地形との関連等についても検討してゆく必要がある。また、草創期は狩猟活動のみではなく、既に細石刃文化期に一部行われていたとされる内水面漁撈、土器の普及・石皿や磨石の増加により利用頻度が高まったとされる植物採集活動など、生業活動の多様化がみられる時期とされており、狩猟以外の生業活動にも注意を向けるべきである。

いずれにしろ、草創期は狩猟を中心とした遊動生活を送っていた旧石器（岩宿）時代的生活様式から縄文的生活様式への転換期にあたる。このことは生業活動や居住活動の多様化、領域やセツルメントシステムの成立、石器製作等の専業集団の発生により説明できるが、その中で隆線文期が重要な位置を占めてくることは明らかであり、今後積極的に評価されてゆく必要がある。

本稿は平成5年に開催された湘南考古学同好会主催のシンポジウム『藤沢の縄文時代草創期を考える会』における発表内容を骨子として、新たに分析事例を追加してまとめたものである。本稿作成にあたっては、次の諸氏・諸機関に御指導・御協力頂きました。感謝致します。岡本孝之、加藤信夫、川口徳治郎、小林謙一、坂本 彰、白石浩之、寺田兼方、戸田哲也、村澤正弘、村田文夫、望月 芳、湘南考古学同好会。

## 註

- (1) 本稿では旧石器（岩宿）時代終末の細石刃文化期から縄文時代草創期にかけての時期について検討対象とするが、縄文時代草創期を隆線文土器以前（草創期前半期）、隆線文土器を伴う時期（隆線文期）、爪形文・多縄文土器を伴う時期（爪形文・多縄文期）の3期に区分して議論することとする。ただし、相模野地域では爪形文・多縄文期の遺跡は僅かであり、遺跡論や分布論を展開することは難しいため、隆線文期を議論の中心とする。
- (2) 南鍛冶山遺跡の草創期1号遺物集中部は遺跡の南西部に位置するが、縄文時代草創期以降、奈良・平安時代に至るまで他の遺構や遺物は検出されていない。これに対し、他の多くの草創期遺跡が上層に縄文時代早期以降の遺物や遺構を包含するため、石鎌など遺物の帰属時期が不明確になりがちである。また、本遺跡で多数の遺構が検出された理由の一つとして、居住集団が比較的小集団でこの地点への居住が繰り返されなかったことがあげられる。
- (3) より不明瞭な事例であるがV区のA遺物集中部でも弧状に分布するピット群が存在する。また、III区A遺物集中部では弧状に配置されていた大形礫が存在しており、内部に隆線文土器片1個体が分布している。いずれも居住に関連する施設である可能性が残されている。
- (4) 住居状遺構にみられる規模や構造の違いには時期的な差異以外にも拠点的居住地、一時的居住地、野営地といったセツルメントの性格や夏家・冬家といった季節による要因も考慮されなければならない。また、今回は触れられなかったが、土坑など住居状遺構以外の遺構についても今後検討してゆく必要がある。草創期において検出されている住居状遺構以外の遺構としては土坑や配石遺構、さらには礫集中（礫群）、土器集中、炭化物集中などがあげられる。このうち貯蔵施設として重要な意味を持つ土坑については相模野地域でも勝坂遺跡、柏ヶ谷長ヲサ遺跡、代官山遺跡、南葛野遺跡などで検出されている。
- (5) I区E遺物集中部については神子柴タイプの打製石斧がまとめて出土しており、出土層位もA～D遺物集中部と比べやや下層であることから今回は分析対象外とした。
- (6) 同様の傾向は南鍛冶山遺跡でもみられ、隆線文期の接合距離グラフは双峰形を呈し、接合距離1～2mと接合距離4～6mにピークを持っている（望月1993）。
- (7) ここでは神奈川県立埋蔵文化財センター発行の『神奈川県の考古学の諸問題』（旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム1994）の中で集成されている旧石器時代終末から縄文時代草創期の遺跡一覧表をもとに分布図を作成した。
- (8) ここでの分析データは、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図をもとにしている。諸河川の特徴としては長さでは境川が突出しているが、河川の分岐率をあらわす水流数／長さは小出川や引地川が高い分岐率を示している。また、河川の規模を示す河川次数（桜井1989・1993）では境川と引地川の河川次数は3であり、他の河川の河川次数は2となっている。これらの諸項目は河川漁撈の問題、移動や交易ルートなどを考える上で重要な基礎データとなる。

## 参考文献

- 雨宮瑞生 1993 「研究展望・縄文時代の定住生活の出現および定住社会に関する史的諸問題」『古文化談叢』第29集、九州古文化研究会
- 井川文子 1985 「狩猟史研究へのアプローチ」『歴史公論』114号
- 池谷信之・辻本崇夫・高橋敦 1995 「駿豆地方縄文時代草創期の居住地について－葛原沢第IV遺跡の住居址と配石遺構から－」『第61回総会研究発表要旨』日本考古学協会

- 稻田孝司 1986a 「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学 6 変化と画期』岩波書店
- 稻田孝司 1986b 「旧石器集団の行動軌跡」『古代史復元 1 旧石器人の生活と集団』講談社
- 今田遺跡発掘調査団 1992 『今田遺跡発掘調査報告書』
- 上松町教育委員会 1995 『お宮の森裏遺跡』
- 柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 1983 『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査概要報告書』
- 樋原考古学研究所(編) 1994 『一万年前を掘る』吉川弘文館
- 神奈川県立教育委員会 1980 『寺尾遺跡』
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1984 『栗原中丸遺跡』
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986 『代官山遺跡』
- 亀井節夫・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ 1981 「最終氷期における日本列島の動・植物相」『第四紀研究』20号
- 河村善也 1985 「最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷」『月刊地球』72号
- 河村善也 1992 「哺乳動物相の移り変わり」『科学』62巻4号
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『神奈川県の考古学の諸問題』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 栗島義明 1989 「旧石器時代住居と遺物分布に就いて(上)」『土曜考古』14号
- 栗島義明 1995 「縄文文化の成立と技術革新」戸沢充則編『縄文人の時代』新泉社
- 慶応義塾 1992 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第2巻 岩宿時代・縄文時代I部』
- 慶応義塾 1993 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』
- 慶応義塾 1994 『慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡 情報基盤センター(仮称)』
- 小林謙一 1993 「慶応義塾湘南藤沢キャンパス(SFC)遺跡」『藤沢の縄文時代草創期を考える会発表要旨』
- 埼玉県埋蔵文化財事業団 1985 『大林I・II, 宮林, 下南原』
- 相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団 1993 『勝坂遺跡』
- 桜井準也 1989 「遺跡立地と河川次数分析」慶應義塾大学民族学考古学研究室編『考古学の世界』新人物往来社
- 桜井準也 1993a 「細石刃文化遺跡と河川次数—内水面漁撈を考える—」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ』佐久考古学会
- 桜井準也 1993b 「縄文時代遺物の平面分布と立地条件」『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』慶応義塾
- 桜井準也 1993c 「縄文時代草創期前半の有茎尖頭器の平面分布について」『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』慶応義塾
- 桜井準也 1993d 「縄文時代草創期前半の遺跡の在り方—慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の再検討—」『藤沢の縄文時代草創期を考える会 発表要旨』
- 佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29号
- 湘南考古学同好会 1993 『藤沢の縄文時代草創期を考える会 資料・発表要旨』
- 白石浩之 1994 「縄文時代草創期の集団構造への接近」『縄文時代』第5号
- 白石浩之・砂田佳弘 1992 「綾瀬市吉岡遺跡群」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
- 鈴木忠司 1983a 「旧石器人のイエとムラ」『季刊考古学』4号
- 鈴木忠司 1983b 「日本細石刃文化の地理的背景—先土器時代遺跡論の試みー」『古代学叢論』

- 鈴木忠司 1993 「再論日本細石刃文化の地理的背景－生業論への視点」『論集 日本原史』吉川弘文館
- 鈴木忠司 1995 「岩宿時代のイエとムラ」『1993年度 岩宿大学講義録集 岩宿時代を知る』笠懸町教育委員会
- 鈴木道之助 1972 「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」『考古学ジャーナル』76号
- 諏訪間 順 1988 「相模野台地における先土器時代石器群について」『神奈川考古』24号
- 千葉徳爾 1969 「野獸の分布と生態」『狩猟伝承研究』風間書房
- 千葉徳爾 1977 「狩猟伝承の基礎条件－野生動物の生態と分布－」『狩猟伝承研究後編』風間書房
- Testart, Alain 1982 The Significance of Food Storage among Hunters and Gathers: Residence Pattern, Population Densities, and Social Inequalities. Current Anthropology vol.23
- 東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会 1993 『もみじ山遺跡』
- 西田正規 1986 『定住革命－遊動と定住の人類史』新曜社
- 羽生淳子 1990 「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』53号
- 原田昌幸 1983 「撚糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』7号
- 原田昌幸 1984 「続撚糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』8号
- 原田昌幸 1988 「縄文時代の竪穴住居跡－その出現・普及の画期を認識する－」『月刊文化財』昭和63年2月号
- Binford,L.R. 1980 Willow Smoke and Dog's Tails:Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archaeological Site Formation.American Antiquity vol.45-1
- Binford,L.R. 1982 The Archaeology of Place.Journal of Anthropological Archeology vol.1
- 藤沢市教育委員会 1992 『藤沢市文化財調査報告書第28集 縄文時代草創期の藤沢』
- 藤沢市教育委員会 1994 『南鍛冶山遺跡 第1巻草創期』
- 前田耕地遺跡調査会 1983 「秋川市前田耕地遺跡－縄文時代草創期の住居址と石器製作址」『季刊考古学』第4号
- 南葛野遺跡調査団 1995 『南葛野遺跡』
- 村澤正弘 1989 「縄文時代－定住生活の確立と土器文化」『大和市史 1 通史編 原始古代中世』大和市
- 望月 芳 1993 「石川南鍛冶山遺跡」『藤沢の縄文時代草創期を考える会 発表要旨』
- 安田喜憲 1975 「縄文文化成立期の自然環境」『考古学研究』84号
- 安田喜憲 1980 『環境考古学事始』日本放送出版協会
- 安田喜憲 1982 「気候変動」『縄文文化の研究 1 縄文人とその環境』雄山閣
- 大和市教育委員会 1983 『深見諏訪山遺跡』
- 大和市教育委員会 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』
- 大和市教育委員会 1988 『月見野遺跡群上野遺跡第3地点』
- 大和市教育委員会 1989 『相模野第149遺跡』
- 大和市教育委員会 1990 『長堀北遺跡』
- 横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会 1995 『花見山遺跡』
- Lee,R.B. and DeVore(ed.) 1968 Man the Hunter,Aldine Publishing Company